

読書のはどのようによばれるのか  
—図書館とその代替機能を果たす施設についてのインタビュー調査から—

豊島 嶺奈, 戸邊 俊哉, 片山 ふみ

【抄録】

本稿は、読書のを提供してきた図書館の变化や新たな読書のを登場を問題意識として、人々はどこを、どのように選り読書をするのかを明らかにしようとした。

インタビュー調査から、主な読書のをとして家、カフェ、図書館、交通機関（電車やバスでの移動中）、多機能化した大型書店があることがわかった。また、読書のを選り理由を類型化したことで、ライフストーリーや読書に関する要素の影響を確認できた。以上を踏まえ、読書の多様性という観点から読書のをについて言及した。

【キーワード】

読書、読書のを、行為論、多様性、図書館

第1章 はじめに

1.1 研究背景・目的

図書館がもつ一部の機能は、書店や書齋、インターネットなどももちうる。例えば、図書館は読書環境の整備等、読書する場（以下、「場」）を提供する機能を有している。しかし、飲食店、あるいは自宅であっても読書は可能である。特に、昨今では、ソファやカフェを設置し「新たな読書スタイルを提供する場所」をうたった大型書店<sup>i</sup>や、立ち読み可能な新古書店<sup>ii</sup>、アマゾンをはじめとするネット書店、六本木ライブラリー等の有料の私立図書館が登場するなどして、「場」の多様化が進んでいる。さらに公立図書館でも外部委託などによって、開館時間の延長、館内や隣接地へのカフェの設置<sup>iii</sup>などが行われており、従来の「場」としての図書館も変化してきている。

本稿は、「場」を提供する図書館自体の变化や新たな「場」の登場といった中で、人々がどの「場」をどのような理由で選りしているのかを明らかにすることを目的とする。それによって多様な「場」がどのように位置づけられているのかを考察していく。

1.2 先行研究と本稿の位置づけ

読書する場についての研究には、子どもの読書環境という文脈で学校図書館や公共図書館活用の現状や環境整備について論じる研究が多く存在する。「1.1 研

究背景・目的」で、本研究では多様な「場」をとりあげることには言及したが、多機能化した大型書店での読書やカフェでの読書に着目した研究はほとんど存在しない。吉田<sup>iv</sup>も、図書館や書店といった読書環境が読書に対するイメージを肯定的に変える可能性を指摘しているが、それぞれの場について詳細な議論はおこなっていない。よって、ここでは先行研究が多く存在する図書館における場の議論に絞って本研究の位置づけを述べる。

「図書館」と「場」の関係をめぐって、例えば永嶺は、音読が主流であった明治時代において、新聞縦覧所・汽車では音読が容認されていたにもかかわらず、図書館では音読が否定され、黙読が強制されたと指摘する<sup>v</sup>。そして、それが図書館での読書の形に影響を与えるとともに、「読書＝黙読」という概念の形成に寄与したという。一方で、富山は図書館の黙読から生まれる雰囲気や、閲覧席のスタイルなど、“利用者”が図書館の空間を求めに来る理由に言及する。そして、図書館が「自分たちを「利用者」として囲い込もうとするその空間を利用しながら、固有の仕方で主体的に意味を生産しようとする」と試みる<sup>vi</sup>という立場のもと、黙読という読書法が自己の発見にもつながっていく契機になることを指摘する。以上から、図書館の「場」は利用者がその「場」を主体的にとらえ返すことのできる場でもあることに言及することができる。

ただし、図書館は「場」としてのみ利用されてきたわけではない。例えば山本<sup>vii</sup>は図書館が街の顔、シンボルの一つであり、待ち合わせの場所やイベントなど多様な場として提供されていることを指摘している。また、根本は日本の地域社会における「居場所としての図書館」論<sup>viii</sup>について言及している。そこでは学童保育や青少年問題、高齢者福祉などそれぞれの観点からの「居場所」として図書館の可能性が提示されている。

以上のように図書館は読書の場だけではなく多様な利用が可能な場所でもある。このことを踏まえたうえで、人々が生活の中でどのように読書する場を位置付けているのかを図書館以外の場も含めて考察する。

## 第2章 研究方法

### 2.1 研究仮説と分析枠組み

まず、筆頭著者によるプレ調査において、ライフストーリーが読書行為に影響することがわかった。さらに秋田も、読書に関する家庭環境や親の影響について「読書という文化的行動においては、親が読書をどれだけ重視し、子どもが読書に参加できるようにするため、どのような環境を実際に準備するかが子の読書量や感情に影響を与える」<sup>ix</sup>と指摘する。そこで本稿では、ライフストーリー、なかでも家庭での読書教育がどのように読書意識に影響し、「場」の選択に影響を与えているのかという開かれた仮説をたてた。

さらに、『「場」の選択の理由』に関しては多岐にわたる回答が予想されるため、M.ウェーバーの行為の4類型（「目的合理的行為」「価値合理的行為」「感情

的行為」「伝統的行為」x)を参考に分類し把握することにした。ウェーバーの4類型は合理的行為(目的合理的, 価値合理的)と非合理的行為(感情的, 伝統的)に大別することができ, 前者は自覚的, 意識的なものであり, 後者は無意識的なものを含む領域である。意識的なものほど調査対象者が語りやすいため, 分類する際にはまず合理的行為か否かを判断し, そうでない場合に非合理的行為の可能性を探るという流れとなる。加えて, 「場」の選択の動機は, 読書する動機と密接に結びついており不可分であるため, 調査結果を分析する際は両者を合わせて「『場』の選択の理由」として扱う。以下では, それぞれの類型についてウェーバーの意図に沿いながら本稿での定義を述べる。

まず, 「目的合理的行為」がある目的を達成するためにもっとも効率的な手段をとる行為を意味するように, 「場」を選択する(読書する), あるいはその他の目的のために効率的な「場」を選択する行為を, 目的合理的な「場」の選択とする。次に, 自らに固有な価値(特定の目的そのものの価値)に基づき, その目的(価値)の実現を行為者が望ましいと評価しうる行為が「価値合理的行為」である。ここでいう価値とは例えば倫理的・美的・宗教的などといったものであり, 予想される結果にとらわれないという点で目的合理的行為からみれば非合理に見えるが, 行為者本人にとっては一貫した計画性をもつもので, 絶対的な基準となるものである。本稿では, 「場」や読書, その他に対して倫理的, 美的, 宗教的などの自らに固有の価値を見出し, それによって望ましいと評価しうる「場」を選択する行為が価値合理的な「場」の選択となる。また, 直接の感情や気分による行為が「感情的行為」であるように, そのときどきの気持ち(計画性のない非合理的な感情)で「場」を選ぶ, あるいは読書する場合を感情的な「場」の選択とした。最後に, 「伝統的行為」について, 本稿では「習慣的行為」と言い換え分析することとした。これは, 「習慣化した日常的行為の多くはこの類型に近い」xiと指摘されるように, 慣習とまでは言えないが, 「場」を選ぶこと, あるいは読書すること自体が習慣化し目的となった, 習慣的な「場」の選択というのが想定されるためである。以上を選択の理由の分類とした。

## 2.2 調査方法

インタビュー調査を実施する。すでに述べた仮説を検証するためには, 各々がうけてきた教育, 成長する際に培われてきた経験, 考え方, 好きな読書のスタイルなどを把握する必要があり, 量的な把握よりも質的な把握がより適していると考えられるためである。なお, インタビュー調査は, ある程度の質問項目を設定し, 回答者の答えによって臨機応変に質問内容を変化させていくことができる半構造化インタビューを採用した。これは, 個々人の選択する「場」の多様性に対応し, 多角的に回答を収集するためである。

調査対象者は大学生を中心とした。大学に入学し, 一人暮らしになるなどの環境の変化に伴い, 読書できる時間を自らの意思で確保しやすくなるという点やアルバイト等によって読書のための金銭的な余裕ができるなど「場」の選択の幅が

それ以前より広がる可能性が高いと考えたためである。機縁法により最初の調査対象者を決定し、その後は雪だるま式サンプリング<sup>xii</sup>によって抽出した。

### 2.3 質問項目

半構造化インタビューにあたって、仮説をもとに以下に示す5つの基本的な質問項目を設定した。

#### (1) 読書量

インタビュー時点の読書量、また、一番読書をしていた時期の読書量について尋ねる。自らで認識している読書量を月、週単位で何冊読むという形で示してもらおう。調査対象者がどの程度読書をしていると考えているのかを知る。本調査では、週に1冊ペース、月5冊以上読むと自らで認識している調査対象者を“読書家”とし、それ以外を“読書家でない”とした。

なお、ここでの「読書」は、一定のページ数があるものを一人で（孤読）、声を出さずに読む（黙読）行為とした。また媒体の観点からは、一定のページ数があるものであっても、パンフレットなどの宣伝を第一義的な目的とするものは読書にはしない。SNSやブログ等、参加型、あるいは双方向性をもつメディアも含まない。雑誌、漫画の場合は読書に含むものとし、読む媒体は電子媒体であっても冊子体であってもよいものとした。なお、ブラウジング、立ち読みも上記の条件に合う場合は読書とみなした。

#### (2) 「場」の利用度

想定される「場」の利用度（利用頻度、利用方法、利用時間）について尋ねる。特に、図書館についてはインタビュー時点で利用する頻度、もしくは一番利用していた時期の頻度、また実際の利用方法・利用時間などについても尋ねる。図書館を利用しない場合は、利用しない理由を確認する。書店については、本のみが置いてある書店、椅子が設置してある書店、カフェが併設してある多機能化した大型書店<sup>xiii</sup>の3つの書店に関して分けて尋ねる。また、古書店に関しては、従来からある古書店と近年増加している新古書店について尋ねる。

#### (3) 「場」を選択する理由

すべての「場」に関して、なぜその「場」を選択したのかを尋ねる。

#### (4) 本などの入手方法

本などを主に買うのか、借りるのかどうかを尋ねる。買うという場合はどのようなタイプの書店で買うかを調べる。時期によって買う、借りるが分かれる場合は、その時期ときっかけについても尋ねる。

#### (5) 家庭での読書教育

調査対象者の親の影響により本人の行動に変化があるかどうかを検討する際の尺度とする。

### 第3章 調査結果

#### 3.1 調査実施概要

調査は、2013年7月～10月の期間に13名に対して実施した。表1は、調査対象者の仮名、性別、職業などを示したものである。以降、調査対象者はアルファベットで示した仮名で表すものとする。

表1 調査対象者概要

調査対象者	性別	職業	専攻
A	女	大学生	情報学
B	女	大学生	情報学
C	男	大学生	理工学
D	男	大学生	理工学
E	男	大学生	教育学
F	女	大学生	法学
G	男	大学生	商学
H	女	大学生	経済学
I	女	大学生	芸術学
J	女	大学生	情報学
K	女	大学生	商学
L	男	大学院生	情報学
M	女	社会人	情報学

#### 3.2 調査対象者の回答（概要）

##### (1) A

両親が読書家であり、実家には両親の本が大量に置いてある。両親の「本にだけはお金をかけてよい」という教育が影響し、借りることよりも自分のお金で本を買うことのほうが多い。200～300冊の本を持っており、二度読み、収集欲求がある。本は必ず新品で買い、汚れることがないように保管しており、本が汚れることを嫌がる。ただし、図書館の本は汚れているから嫌だとは思わない。

読書は主に家、カフェ、電車で行う。「場」に対して強いこだわりをもつ。読書をする行為自体に意味を感じており、本を読むのに邪魔をされない読書をするにふさわしい場所で読書をしたいという欲求がある。騒がしいのが嫌な場合は家で読む。また自分であれ他人であれ「読書をして待っている姿」に魅力を感じて

おり、カフェなどで待ち合わせをする際に1時間ほど早めに行き、読書をする  
ことがある。自宅から約1時間かけて電車で通学をする関係上、行き帰りの車  
内でも読書をすることも多い。本を常に持ち歩き、空いた時間に読書もする。

書店に行く際の滞在時間が長く、ブラウジングを好む。また、決まった書店で  
のみ本を購入する傾向がある。多機能化した大型書店に関しては、実家の近くに  
できた直後には積極的に行っていた。それは新しいものへの興味から無性に行き  
たくなかったからであった。そして、最初は本を持ってお茶を飲みに行くつもりで  
あったが、結果的には読んだ本を買っている。

## (2) B

Bは、大学に入学後、本を買うようになったが、それ以前は借りる頻度が高か  
った。借りる場所は主に地元の公立図書館であり、小学生から高校生の受験期ま  
で平均して2週間に1度程度通っていた。特に小学生の頃は、土曜日を図書館  
の日と決め、雪の日であっても通った。また、中学生までは学校図書館も並行し  
て使っていた。高校生の受験期には、勉強のために行くことも多く、図書館とい  
う場所が身近な場所であった。小学校高学年から中学校入学にかけて、友だちと  
図書館に行くという習慣がつき、Bの中では図書館は読書の場ではなく本を借り  
る場である一方で、友人と行く場合は共読の場であった。一人で利用するとき  
はブラウジングのため2時間前後図書館に滞在し、借りたら帰宅し、家で読むと  
いうサイクルであった。公立図書館に行く機会がないため、本は新品で購入する  
ことが多く、週に1冊のペースで読書をしている。

主に利用する「場」は家であるが、頻度は低いもののカフェや公園もあげられ  
た。家が多い理由は集中できるからである。また、気分を変えてオシャレなカフ  
ェで読んでみたいというような欲求はあるが、泣けるものなどを外出先で読むこ  
とに抵抗がある。書店では椅子に座って読んだりせず、買って帰り、持ち歩  
き、空いた時間（授業の休み時間、電車移動中など）に読書をすることも多い。

多機能化した大型書店に関しては、インタビューをした時点で、まだ利用した  
ことはない。購入していない本を読んでよいというシステムに疑問を抱くもの  
の、気軽に本を読めるスペースが書店に設置されていることに魅力を感じ、読ん  
だ本を買うことになるかもと予想する。

## (3) C

公立図書館に幼いころから通っている。公立図書館を利用し続ける理由として  
は、読みたい本が多く、買いたすとキリがないので借りるという点があげられ  
る。学校図書館は蔵書量が少ないためほとんど利用しておらず、公立図書館にな  
じみ、魅力を感じている。ブラウジングを好み、公立図書館では平均2時間は  
滞在している。その際、閲覧席で本を読むことはなく、その場で立ち読みをする  
ことが多い。読書量は月に5, 6冊程度で、小説や漫画を好んで読む。

最初に図書館に連れて行ったのは両親であるが、その後は自分から積極的に図  
書館に通っていた。書店の利用は月1回程度であり、図書館に比べて本屋の滞

在時間は短く、長時間の立ち読みはしない。これは本を買う場所で読むことに罪悪感をもっているためである。本屋での新刊チェック後、それを図書館で借りる、というサイクルがあるため、本屋は品揃えで選択することが多い。「場」は主に家であるが、本を持ち歩いているため、電車、教室などもある。外で読む可能性はあるが読書のために積極的に外へ行くことは図書館を除いてない。座ってゆっくり読めるのが一番ではあるが、場所より本を読むことが大事であると話し「場」に対して特にこだわりはもっていない。

多機能化した大型書店に対しては、店内でお金を払わずに読めることを推奨しているという点に興味を持っているが、買わずに読むという点に戸惑いがある。

#### (4) D

小中学生のころに学校図書館に毎日通い本を借りていた。また、小学生のときに親に公立図書館に連れて行ってもらったことをきっかけに、中学生、高校生の時には自転車を使用し30分かけて公立図書館に行くこともあった。両親共に読書好きであり、本は買うより図書館に借りにいくことが多い環境で育った（図書館では借りたついでに読書が多く、読書のために図書館に行くことはあまりない）。中学生までは、図書館で借りるならば買う必要はないと考えていた。高校生になったころに大型書店ができた。ブラウジングを好むため、書店での滞在時間が増え、このときから少しずつ本を買うようになった。

インタビュー時点では学術書は大学図書館で借り、小説や漫画は書店で購入している。カフェなどで日常的に読書はしないが、仮にカフェで待ち時間があれば飲みながら本を読んだりするという。書店の利用は月に1回程度で、利用する書店は商品の取り扱いが幅広いという点で大型書店を選ぶ。そういった書店は店内に椅子の設置があるが、読書の時間をしっかりとりたいという気持ちや書店で購入していない商品を読むことに抵抗があるため、椅子に座って読むことや、書店で立ち読みをすることはほとんどない。

多機能化した大型書店のゆったりと座って、飲食をしながらリラックスして本を読めるという特徴には魅力を感じているものの、本が汚される可能性などを考慮すると購入目的での利用は難しいと述べている。

基本的に自分の部屋で読むことが多いが、本を持ち歩いているため、電車や教室、飲食店で読むこともある。ある程度集中できる場所ならば、特にどこかにこだわっているわけではないが、主に家が一番落ち着く「場」と述べてた。

#### (5) E

実家から公立図書館が遠く、小学生のころには両親に車で連れて行ってもらうことが多かった（ただし、Eの両親はあまり本を読まない）。中学に入り部活やゲームに興味を持ち図書館に行かなくなり、読書から遠のいた。高校に入学後、学校図書館に置いてあった岩波ジュニア新書を読むようになり、娯楽と勉強両方の意味で読書をしている。今は図書館の静かな空間の雰囲気の魅力を感じているが、一方で図書館では音が出せない空気があり周りの目が気になるとして、ブラ

ウジングについてはガヤガヤしている書店の方がいいとする。読む本はほとんど購入しており、週1で書店に行きブラウジングをしたのち、新古書店であるブックオフやブックオフオンライン<sup>xiv</sup>で目当ての本をまとめて買うことが多い。中高生のころには、家から離れた場所に椅子が設置してある書店があり、たまに椅子に座って読書をするがあった。しかし、長く居座ることや立ち読みに対して罪悪感があり、座っている間も10分から20分程度だった。また、飲食店においても長く居座ることに申し訳なさを感じている。多機能化した大型書店に関しては、存在を知らなかったが、斬新で面白く、本も読めてカフェでゆっくりできるなら一石二鳥で使ってみたいと思っている。

「場」は主に家であり、特に新書は自分の部屋の机という静かな環境で集中して読みたいと述べた。電車などの長距離の移動があるときのみ、本を持っていくが、その際は学術の啓蒙書としての新書ではなく小説が多いと述べた。実家に帰る際の電車での読書を好み、自然を感じながら読書をしたいとも考えている。

## (6) F

Fは小学校のころから読書好きである。小中学校の時には週に1度2時間程度公立図書館に滞在し読書をした。友人と図書館に行くこともあり一緒に館内で読書をするもあった。このことについて、他の娯楽施設がなかったためと話しており、公立図書館が友人と遊ぶ場としての機能を果たしていたことがわかる。学校図書館も利用していたが、広さや蔵書量の点から頻度としては公立図書館の利用のほうが多かった。高校生になるとアルバイトをはじめ、本を購入するようになったため、図書館に通うことはなくなった。大学図書館を含め図書館はあまり利用していないが、週に1冊のペースで読書をしている。

高校生のころから本を集めることが好きになったが、積読状態になることも多い。小説は新品で、漫画は中古で購入することが多い。帰り道などに、見かけた書店にフラッと立ち寄り、30分程度ブラウジング（あらすじを読む）をすることが日課である。椅子が設置してある書店や、多機能化した大型書店を利用したことはあるが、椅子に座って本を読むことに「オシャレぶりすぎている」といったような気恥ずかしさを感じ、あまり行かない。また同様の理由で、自らカフェで読書をしようとはしない。また、多機能化した大型書店に関しては、新本と食べ物が同じ空間にあることに疑問を抱いており、いい印象をもっておらず、利用するなら本を買う目的のみでいくとする。そのような観点から書店より図書館の方が空間的に好きであるという。

家にいたいという気持ちがあることから、主に本を読む場は家である。しかし、本を持ち歩いているため、少しでも空いた時間があれば読書をする習慣もある。例えば電車での移動中や飲食店での待ち時間など（ただし、食べながら読むことはない）がある。

(7) G

インタビュー時点で週1から週2のペースで勉強のために読書をしている。両親は読書好きであり、また父親が本などを収集することが好きだったため、幼いころから家に大量の本があった。ただし、図書館に連れて行かれることはなく、読書よりも勉強をすることをすすめられるほうが多かった。小学校のころには（一人でいると思われたくないから）友人を誘い学校図書館に週に1度通い児童書を読んでいた。中学になると母親に勉強しに図書館に行くように言われ、公立図書館に勉強しに行くことは何度かあった。公立図書館は勉強目的以外で利用したことはない。利用カードを作ることが面倒であるうえ、図書館が堅苦しく入りづらいもの、図書館だと話すことができないと考えていたからである。

Gは新品の本に触ると汚れてしまい、買う必要がでてくると考えている。ただし、書店の紐等で縛られていな雑誌は本よりは手に取ることはできると考えている。

椅子が設置してあるような書店に行くことはあるが、立ち読みをするのみで座ることはないという。インタビューの中で多機能化した大型書店の存在を初めて知ったが、その場で読むだけで買わないで済ますことになる可能性に罪悪感もち、いい印象をもたなかった。

「場」は主に家である。さらに勉強の読書はリビングで、趣味の読書はベッドでと、同じ家の中でも場所を変えている。カフェなどでは落ち着かず、わざわざ本を読みに行く必要もないと感じており、勉強関連の本以外は持ち歩くこともない。

(8) H

両親が読書好きだが、特に読書を推奨されたわけではなく自ら絵本などを読んで育つ。小学4年まで住んでいた地域では学校図書館が充実しておりよく利用した。小学校高学年から中学にかけては引っ越した先の学校図書館に満足できず毎週公立図書館に通い、1日1冊のペースで本を読んでいた。基本的に本は買う派であり最低でも月に2冊のペースで読書をしている。

両親が中古で本を買い、ハイペースで処分していくのに対し、Hは二度読みのために必ず新品で買う。表紙などの装丁によってはブックカバーをつけるなどして保存し、本をきれいな状態で保ちたいという考えが強い。

本のみが置いてある書店に日常的に通い、30分程度かけて隅々までブラウジングしている（ただし、買わずに読みすぎることには申し訳なさも感じている）。また、椅子が設置してある大きめの書店に行き、候補の本を店内の椅子で試し読みし、買う本を決定することもある。多機能化した大型書店にはよい印象を持ち、まだ利用したことはないが、行きたいと思っている。特に、カフェ等でじっくりと新刊のチェックなどができること、汚れについては本屋であるからきれいな状態に保つてであろうと考えている。

「場」は主に家であるが、他にカフェや電車、教室がある。家が一番集中できる「場」であるが、大学入学後にはゆったり過ごせそうなカフェにお茶をしに行

くついでに、本を持って行くことが月に数回ある（ただし、せかされている雰囲気のある飲食店で読書することには否定的である）。そのほか、本を持ち歩くことが多いため、カフェ以外にも電車や授業が始まる前の時間など空いた時間にエッセイなどの途中でできても問題がないような本を読んでいる。

(9) I

月に1, 2冊程度のペースで読書をするが、図書館に行くことはほとんどない。両親は読書家ではない。しかし、Iに対して読み聞かせをしたり、本を読むように薦めたりはした。また、祖母に公立図書館に連れて行ってもらったこともあった。中学に入学後、調べ学習のため学校図書館や公立図書館を利用した際、必要な本が置いていなかった経験から、図書館では必要は本が手に入らないというイメージがつき、図書館に対して悪い印象をもっている。また、図書館の本に汚れがあることなどから嫌悪感をもっている（ただし、新着図書は大丈夫であるという）。勉強のときや、大学にいるときの暇つぶしに図書館に行くことはまれにあるものの、図書館という場所で本を手にとることに抵抗がある。

本は幼いころから買う（買ってもらう）ことが多い。買った本は二度読みすることが多いが、収集癖などは特にならない。書店自体が好きであり、近くにある一般的な書店にブラウジングや立ち読みのためだけに立ち寄ることがある。娯楽系の本はリアルな書店で、勉強関連の本はネット書店で買うことが多い。椅子が設置してある書店は近くにないためあまり利用しないが、利用する場合も座って読むことはない。多機能化した大型書店は利用したことがないが、好印象をもっている。そこには、商売の一環であるという認識、図書館でなく書店であるから売り物の本の綺麗さは維持するであろうという想定がある。

読書は主に自分の部屋で空いている時間にするという形をとっている。本は持ち歩かないため、そのほかの場所で読書をすることはほとんどない。

(10) J

読書量自体はあまり多くない。近所の図書館がリニューアルされたことをきっかけに公立図書館に通うようになった。幼いころはたまたま図書館に連れて行ってもらっていたが、薄暗く清潔感のない悪いイメージをもっていた。リニューアルを機にそのイメージが覆され図書館の空間に魅力を感じている（勉強のためにも利用する）。読む本は基本的にこの公立図書館で借りることが多い。

書店にも好感を持っており、駅に設置してある一般的な書店には平日はほぼ毎日立ち寄って本を読む。この他にも特定のターミナル駅付近にある椅子が設置してある大型書店に無性に行きたくなる時があり、1日かけて本を眺めに行くことがある。また、多機能化した大型書店に関しても、売り物を飲みながら読めるのは理想的であるとして、お気に入りの書店にわざわざ足を向けることも多い（売り物の本を汚したりすることについて若干不安であるともいう）。まれに椅子が設置してある大型書店に行き、本を買ったのち、多機能化した大型書店で飲みながら読書をするなど、書店の梯子をする時もある。カフェでアルバイトをし

ていることもあり、カフェ自体の空間を好み、お茶を飲みがてら勉強や読書をしに行くことも多い。

「場」は主に図書館、カフェ、多機能化した大型書店である。また、本を持ち歩いているため電車で読むことも多い。電車で読書をする事自体が好きなのもあり、乗っている途中から移動目的よりも電車で読書をする事を目的とすることがある。また、電車などで読書をする際には、iPhoneのアプリで勉強になるような英語の小説などを読むことがある。

#### (11) K

小さいころから週に1回、母親に公立図書館に連れて行ってもらっていた。母親が読書家であり、家に大量の本があったため、読書は身近な存在であったが、母親から読書をするよう推奨された記憶はない。小学校のときに引っ越してからは距離の問題から公立図書館および学校図書館の利用はしばらくなかった。中学のときの朝読を機に教室でよく読書をするようになった。高校、大学では学校図書館、大学図書館も利用している。一度読んだら満足するため本を借りることのほうが多い。収集欲があった母親とは反対である。大学でゼミがある日にはついでに大学図書館に必ず行き、4時間ほど読書をしている。大学図書館という場所が読書にあっていと好感を持っている。大学1年生の時には公立図書館にしかない本を借りてきて、大学図書館で読んでいた。勉強のためにする読書に関しても大学図書館で行っており、集中できる環境が図書館であると述べた。

書店には月に1回程度一般的な書店に行き見開き1ページほどをブラウジングするぐらいで読書はしない。椅子が設置してある書店に行くこともあるが、そこで読書をする事はない。また、カフェなどの飲食店で読書をする事はどうしても気になる本がある場合以外ない。多機能化した大型書店に行ったことはなく、買ってない本を自分が汚さないか心配で読めないかもしれないと述べた。

「場」には静かさが必要であると考えており、主に家か図書館を選択する。本は持ち歩かない。家で読む際には、趣味として読む本はベッドで、勉強として読む本は机で読むなど、ジャンルによって場所を変えている。また、読むときは部屋を整理するなど、読書をする際の環境にこだわる側面がみられる。

#### (12) L

Lは大学院入学後に今までよりも読書をするようになり、週2冊程度読書をする。両親は読書家ではなく図書館にもあまり連れて行かれなかった。図書館で本を借りた記憶はあまりない。しかし大学に入学後は月に1、2回公立図書館で借りることがあり、それを授業が終わった後に大学図書館で読むことがあった。

読書は主に教養をつけるためであるとするが、娯楽目的に小説を読むこともあると述べる。本は中古で新古書店やネット書店などで買い、線を引きながら読書をする。線を引くことや書き込みをすることにこだわりがある。また、二度読みをすることが多いため、書き込みと二度読みのために本を買っている。出先で時間ができたときにカフェで読むことがある。

週に1回ブラウジングを目的に一般的な書店に行く。この時に興味を持ったものをネット書店や新古書店で購入している。ネット書店で一気に購入しているため、積読が多い。椅子が設置してある書店や多機能化した大型書店を利用したことはあるが、利用の仕方は一般的な書店と特に変わらず、座読スペースに特に興味がない。図書館、書店はどちらも本を探す場所であり、イメージはどちらもあまり変わらないという。

「場」は主に家、研究室などである。さらに、家で読書をするのが日常と述べるなど、読書が生活の一部にもなっている。本を3冊程度持ち歩いており、出先の電車や空き時間にカフェに入り読書することはあるが、あまり場所にはこだわっていない。

### (13) M

Mは読書好きの両親がいる家庭で育ち、幼いころから公立図書館に連れて行ってもらっていた。父親が国語の教師だったこともあり、独自の読み聞かせなどを受けており、小さいころから読書好きであったという。小学校のときには学校図書館と公立図書館を併用しており、常に本が手元にある状態だった。公立図書館では、両親が本を借りたらすぐ帰っていたため読書をすることはなかった。公立図書館の勉強室を利用するなど、図書館の利用はしていた。

綺麗なものが好きなこともあり、本は新品を書店で購入することが多い。書店に対する思い入れも強く、書店に寄ること自体を楽しみにしている。一般的な書店には仕事帰りに寄ることが多い。書店は本を読む場所ではなく売る場であると捉えており、ブラウジング、あらすじを見るなどしてその場で買うことが多い。椅子が設置してある書店や多機能化した大型書店にも行くことはあるが、売り物の本を読むと汚してしまうということを考え、本の配架の仕方には興味を持ったものの、未購入の本をカフェで読むことはない。

図書館で借りることの多い両親とは反対に、買うことが好きであり、本を集めたいという収集欲がある。そのため積読が常に10冊以上ある。移動時間に読むことも多いため、本が傷まないよう、また、周囲に読んでいる本が見られないようブックカバーを付けて本を持ち歩いている。持ち歩くことを主眼にしているため本はほとんど文庫で買っている。

主な「場」としては家や電車、カフェなどがあげられる。自分の部屋が好きということもあり家の床に座って読むことが多い。ただし、晴れている日などに出かけたいと思い、本を持って喫茶店に行くこともある。暇さえあれば本を読むタイプであるため、電車の移動中や、喫茶店やファーストフード店で空いた時間に読む生活をおくっている。

## 第4章 考察

### 4.1 読書の様相

13名全員のトランスクリプトを基に各々の読書行動、場所の選択行動に対してコーディングを行ったのち、複数の調査対象者に共通したコードをすべて抽出した。このコードをもとに13名各々の「場」に関するインタビューの回答をKJ法によってグルーピングすることにより4つに分類することができた。その分類とはライフストーリー、読書に関連する要素、「場」、「場」の選択理由の4つである(表2を参照)。この分類によって、本稿の目的の一つである、どのような「場」が選択されているのかが判明した。また、「場」の選択の理由についてはM.ウェーバーの4類型を参考に分類した(4.2で詳述)。表2の「場」の選択理由欄には、この類型を表示するとともに、その類型に該当する特徴的な事例を例示した。

表2 分類項目とコードの対応表

ライフストーリー	読書に関連する要素	「場」	「場」の選択理由
図書館に行くきっかけ 他人の目線の意識 親が本を買うor借りる 親の収集癖 収集癖 親が読書家 一人が好き 書店の印象 図書館の印象 読書のきっかけ	読書量 本を借りるor買う 新品or古本 冊子体or電子媒体 ブックカバー 積読 二度読み ブラウジング 愛書家 立ち読み 音楽を聞くか否か ジャンル 勉強する場 本を持ち歩く 多機能化した大型書店の印象	家 学校図書館 公立図書館 大学図書館 一般的な書店 椅子設置の書店 多機能化した大型書店 店 教室 カフェ その他飲食店	目的合理的行為 ・ 集中できる場所で本を読みたい 価値合理的行為 ・ 読書をする行為自体に意味を感じており、読書をするにふさわしい場所で読書をしたい 感情的行為 ・ ふらっと立ち寄る ・ 気分転換 習慣的行為 ・ 特にこだわりはなく、空いている時間があれば読む ・ 暇つぶし

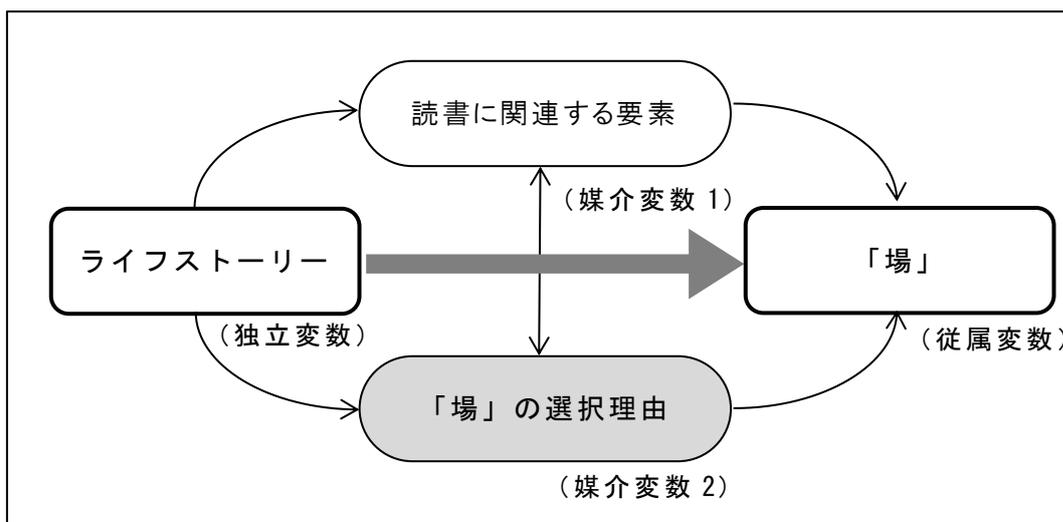
さらにこれら4つの分類(ライフストーリー、読書に関連する要素、「場」、「場」の選択理由)の関係について、「ライフストーリー」が「読書に関連する要素」や「「場」の選択理由」と結びつくことで「場」が多岐にわたることも明らかになった(4.2以降で詳述)。

以上を踏まえたうえで、分類項目の関係を概念化したものが図2である。図2では、影響を与える側であるライフストーリーを独立変数、その結果選ばれた「場」(読書する場)を従属変数とした。また、この両者の関係を補助する2つ

の要素（読書に関連する要素、「場」の選択の理由）をそれぞれ媒介変数 1, 2 と表現している。

以下では、「ライフストーリー、なかでも家庭での読書教育がどのように「場」の選択に影響を与えているのか」という本稿の開かれた仮説を検討するために、具体的な事例に合わせて変数間の関係性をみていきたい。

図 2 「場」の選択に影響する諸要因



#### 4.2 「読書に関連する要素」の影響

##### (1) 愛書家的態度

自分が買った本それ自体に愛着があり汚したくないと考えるのは A, G, H, M である。彼らは書店を好み、行く頻度も高い。また彼らの親は読書家で、読書が身近な家庭で育っており、親子間の読書に対する態度に関係があることも視われる。ただし、愛書家であるにもかかわらず、「場」に食堂やカフェ等の飲食の場が含まれている。これは、本を汚したくないという気持ちがある人は、汚れる恐れのある場所を「場」としないだろうといった単線的な見方を捉え直すことに繋がるであろう。

一方、親から食べながらの読書をしないように言われた経験があるのは C と E である。C は本が手元があれば食事中でも読んでいるかもしれないと言いつつも、飲食店で読書をほとんどしない。それは親から言われたことだけでなく、読んでいるのが図書館の本で汚せないからだと述べる。E は飲食店で読まないのは、親に言われたからというよりもお店の人に申し訳ないから、食べながらでは集中できないからだと言いつつも、これらから、例えば C のように読書と飲食の関係についても教育の影響がある可能性に言及することができる場合もあると考えることができるのではないかと述べる。

## (2)読書量

インタビュー時点で読書量が多い人の中でも、特に幼いころから本を読んでいる人たちとして A, B, C, F, M がいる。彼らは幼少期から頻繁に図書館に通っていた点で共通している。ここから読書への親和性と図書館の利用の関係に言及することもできる。しかし、その利用方法は多様であり、勉強などの気晴らしといった利用 (A)、友人との娯楽施設としての利用 (B, F) など、それぞれの日常の中で独自の図書館利用方法を見出している。つまり、その関係は必ずしも一様な読書の形や図書館の利用を導くわけではないことを確認できた。

一方、自らを読書家でないと考えているのは I と J である。2名は図書館が薄暗く、配置してあるモノ (情報、媒体) が古い等のネガティブなイメージを持っていた時期がある。一方で書店に対しては肯定的で、話題性や未使用性の観点から本や雑誌などを書店で読む傾向がある。2名とも多機能化した大型書店やカフェでの読書にも肯定的である。ここから、新しいモノに積極的にアクセスしようとする人には、図書館に対して (情報・媒体が古いからと) 否定的になる可能性、そしてそれが読書の場についての捉え方にも影響すると考えることもできる。

## (3)メディア

インタビューを行った 13名のうち、電子媒体を利用して読書をするところがあると答えたのは、場所も気にせず読めるからとした J だけであった。その他の人は、主に冊子体での読書が中心であると答え、その理由としては「本をめくる感覚」や「紙の質感」、「ページの減っていく感覚」など、冊子体へのこだわり可言及する場合が多かった。

ただし、冊子体へのこだわりに加えて電子媒体では「目が疲れるから」という理由にも言及する人 (D, M) や、冊子体へのこだわりには言及しないが「目が疲れるから」という人 (I, K) もいた。また I は電子媒体を利用しての読書ではリーダーを買わなくてはいけないから読まないともいう。これらの点から、メディアがそれぞれに持つ特性が、間接的に読む場所と関係をもつ可能性が示唆される。

### 4.3 「場」の選択理由と分類

各調査対象者には主に利用する「場」とそれ以外の「場」という区別がある (主な「場」は必ずしも一か所ではない)。また生活の変化によって主な「場」が変化していた。そこで、ここではインタビューをした時点の主に利用する「場」、「場」としての図書館 (主な場所にする場合、主な場所ではないが利用する場合)、そのほか特記すべき「場」がどのような理由で選択されるのかを研究仮説で示した 4 類型をもとに類型化を試みた。

#### (1) 家を主な「場」としている場合

家を目的合理的に「場」と選択するのが A, B, C, D, E, H, K である。「集中して読める」「静かなところで読書をしたい」「時間を気にせずに読みたい」などの理由で家を選択している。

習慣的行為で「場」を選択するのが F, G, I, L, M である。「暇つぶし」「だらだらしながら読む」など、家にいて時間ができたときの習慣的な過ごし方として選択する。

#### (2) カフェを主な「場」としている場合

A, J, M がカフェを主な「場」とする。A はカフェで誰かを待っている姿が美しいという価値合理的な理由で「場」を選択する。J と M は、カフェで一休みする、外に出かけるついでに読書をするとして習慣的な「場」の選択を行っている。

#### (3) 交通機関を主な「場」としている場合

A と M は交通機関（電車やバス）での移動中を読書の主な場としている。どちらも、かばんに文庫本を入れており、移動する途中で暇になったときに習慣的な行為として選択している。

#### (4) 研究室を主な「場」としている場合

L は研究室を習慣的に場として選択している。研究の合間に読書を行うようになったという。

#### (5) 多機能化した大型書店を主な「場」としている場合

J は多機能化した書店は、売り物なのに読める環境は理想的なあり方であると価値合理的に選択している（次項にて詳しく言及する）。

#### (6) 図書館について

##### ① 図書館を主な「場」としている場合

J と K が該当する。J は公立図書館に「読書空間」のようなものがあるからと目的合理的に、K は大学図書館を一番静かで落ち着いて読めるからと目的合理的に図書館を選択している。

##### ② 主な「場」ではないが、図書館を「場」とする場合

A, B, C, D, E, F, L が該当する。B, C, D, E, F は公立図書館で本を借りるついでに読むとして、習慣的な場の選択をしている（ただし、B は友だちと行くときの（会話の延長として）共読の場として選択する）。A は大学図書館でついでといった習慣的な場の選択をする。L は大学図書館を何となくといった感情的な理由で選択する。

#### (7) 上記以外の「場」の選択に関する事項

感情的行為として「場」を選択する場合もある。主な場ではないが A, E, J, L の書店にフラッといきブラウジングをする、天気がいいのでフラッと外の公園で読むなどが該当する。

その他に、「場」を選択“しない”観点から理由に言及できることがわかった。インタビュー時点で、公立図書館を読書の場と見ていない G は、図書館は読む場というより借りるところであり、ブラウジング（立ち読み）も想定していない。ここには図書館を勉強する場、もしくは借りる場として利用してきたという習慣的な理由がうかがえる（親から図書館に勉強に行くように言われていた）。そのほかに、M は親と一緒に公立図書館に行って読書はせずに借りて帰るという習慣があったから、読書の場にならなかったと述べている。

#### 4.4 「読書に関連する要素」と「場」の選択理由の影響

ここではカフェが併設してある多機能化した大型書店、その中でも購入しなくても自由に読むことができる場合に焦点を当てる。その場合に重要になるのが、<カフェ>が併設してある多機能化した大型<書店>というように、多機能化した大型書店については「カフェ」「書店」に対する視点の独自の調整が調査対象者にあるのではないかということである（例えば、一般的な書店やカフェを「場」としない場合であっても、それがカフェ併設の多機能化した大型書店もまた「場」としないといったようには必ずしもならない等）。

まず調査結果から多機能化した大型書店を「場」として（1）選択できる（2）否定的なところもあるが選択できる（3）選択できない（4）肯定的なところもあるが選択できない、の4つに分類する。そのうえで、一般的な書店とカフェを単独でどのように利用しているのかを明らかにしつつ、多機能化した大型書店に対する視点について言及する。

##### （1）選択する場合

カフェ併設型の多機能化した大型書店を「場」として選択するのは E, H, I, J である。選択の理由として、例えば E は本も読めてカフェでゆっくりできるのは一石二鳥、H はきれいな状態を保ちつつ購入しないでじっくり本の中身を確認できる、J は売り物なのに読めるのは理想的だと述べている。

彼らは一般的な書店を「場」として選択しているが、売り物の本を確認程度以上に立ち読みすることが迷惑や汚損に繋がることを気にかけている様子がうかがえた。

一方のカフェについて、「場」とであるとする人が多かった。しかし、急かされない雰囲気を求める人（H）や、長く居座ると申し訳ないと考えて「場」としない人（E）もいた。

以上から、調査対象者が抱いていた書店とカフェそれぞれの「場」に対して持っていた視点が、カフェ併設型の多機能化した大型書店において相互にポジティブに影響し合ったと考えることができる。

(2) 否定的なところもあるが選択する場合

カフェ併設型の多機能化した大型書店について、否定的なところもあるが選択するのが A, B である。例えば A は買ってない本が汚れることに否定的であるが、思わず選択したくなるという（結局は買ってしまふかもしれないともいう）。B は買わずに読めるという点にためらいがあるが買う前に気軽に読める点で選択するという（結果的に買うかもしれないともいう）。

一般的な書店に対しては、A, B ともに購入して帰ることが多い。ただし A はブラウジング目的でも立ち寄ることが多い。

カフェについては、二人とも「場」として選択する（B は主な「場」ではないが気分を変えてみたいという理由で選択する）。

以上を踏まえると、一般的な書店で買って帰ることが多い二人にとって、そこが書店であるという意識で多機能化した大型書店を眺める限り、未購入の本を読むことが許容されるカフェ併設型の多機能化した大型書店はなじまない。しかし A, B がカフェであるという意識から多機能化した大型書店を眺めてみると「場」になりえる。これはカフェの視点と書店の視点が併存しているとも考えることができる。

(3) 選択しない場合

カフェ併設型の多機能化した大型書店を「場」として選択しないのは F, G, K, L, M である。例えば、F は書店として買いに行くかもしれないが、カフェとしては行かないという。G は購入しないで読むことに罪悪感を持ち選択しないという。K は汚すかもしれないから読めないかもしれないという。L と M は本を探しにいくためや買うために使うだけで、カフェとして使わないという。

一般的な書店について、F と G は売り物の本を読むと汚れることにつながるからと「場」とすることに躊躇する。また、ブラウジングもほとんどせず「場」としない場合（K）、探す・買うだけで「場」としない（L, M）場合がある。

カフェについては、恥ずかしい（F）、落ち着かない（G）、汚すかもしれない（K）などとしてカフェを「場」と捉えていない場合がある。一方で、カフェに行ったついでに読む可能性があるという L や、主な「場」の一つとして積極的にとらえている M もいる。

以上から、カフェ併設型の多機能化した大型書店を「場」としない場合には、買うための書店としての認識が強く、たとえそこに L や M のようなカフェを「場」とする視点が介在しても、「場」として選択しない結果になると考えることができる。

(4) 肯定的なところもあるが選択しない場合

カフェ併設型の多機能化した大型書店について、肯定的なところもあるが選択しないのが C, D である。例えば C は立ち読みしやすい雰囲気に対しては肯定的である一方で、買わずに読むことに罪悪感があり選択しない。D は飲食が禁止

されていなくリラックスできる点に魅力を感じつつ、商品なのに汚れる状態にすることに否定的で選択しない。

二人は一般的な書店については、確認・探すためといった利用が多く、立ち読みなどもせず「場」としない。

カフェについては、読書目的で行くことはなく待ち時間等で読む可能性はあるとする（ただし、積極的に「場」と捉えてはいない）。

以上から、カフェが併設された多機能化した大型書店について、書店の視点が基本的にはありつつも、そこにカフェの視点が介在することで肯定的な視点もできると考えることができるのではないか。

## 第5章 結論と今後の展望

本稿は、人々がどこを、どのように読書の場として選択しているのかをインタビュー調査から明らかにし、それによって多様な「場」がどのように位置づけられているのかを図書館との関連に言及しつつ明らかにすることを目的としていた。

まず、人々は“主に”読書をする場と、“それ以外”の読書の場という捉え方をしていた。そして、主に利用する「場」としては家が最も多く、そのほかに交通機関（電車やバス）、カフェ、図書館、多機能化した大型書店を主な「場」として利用している人がいた。次に「場」の選択については、皆が読書の場所を同じ理由で選択しているわけではなく、それぞれ場所に応じて選択している理由が異なることを類型化や、カフェ併設型の多機能化した大型書店に対する各自の認識から導いた。そして、ライフストーリー、読書に関連する要素がその選択に影響していることもわかった。これらの点から、「場」に対する意味づけは必ずしも皆同じではなく、多様であると考えることができる。

また、主な読書の場に注目すると、「場」が読書するという行為自体よりも優先して選択される場合と、読書する行為自体が「場」よりも優先される場合があった。前者は、読書をするための場所・読書にふさわしい場所で読書をしたいといったいわゆる価値合理的な「場」の選び方を行う場合があり、カフェや多機能化した大型書店が選ばれていた。後者は、目的合理的あるいは習慣的に読書を行う場合があり、家、電車、カフェ、図書館などあらゆる「場」が選ばれうる。後者のような読書するという機能を重視するタイプは物理的・空間的制約の少ない電子媒体での読書に積極的になりうるとも考えられるが、電子媒体での読書については被調査者13名中12名が否定的であった。ここから、紙媒体による読書と電子媒体による読書では、読書という行為への意味づけが異なる行為者が多く存在すると予想され、今後は場の選択と言う議論においても両者は分けて検討して行く必要がある。

以下では、本研究で読書機能をもつ場の代表として取り上げた図書館について、同機能をもつほかの「場」との比較からみえてきた点について言及する。インタビュー調査から、図書館の読書できるスペースが不足している、親と一緒に

図書館に借りに行ったが読書はしないで帰ったという子ども期の経験などから、公立図書館を読書の間ではなく、借りる場（G, K, M）と捉える人がいることがわかった。公立図書館で読書するという人でも、それを借りに行ったついでの試し読みやブラウジングといった習慣的なものに限定している人もいた（C, D, E）。また、図書館は読む間ではなく本を探す場であり、書店と違い本を借りることができ、試し読みができる場であるとする人もいた（L）。これらから、試し読みやブラウジングという読書の形が図書館で定着している可能性とともに、それが従来から図書館が重要視してきた貸出機能と強く結びついていることに言及することもできるのではないだろうか。

さらに、図書館の静けさに戸惑いを持つ人（E, G）、一人で読んでいることに恥ずかしさを持つ人（H）、一人では読まないが共読ならしていたという人がいた（B, F）。これは、黙読を中心にして図書館の読書の形を考えることが、一方でそれ以外の読書の形にはなじまない場として図書館を認識させてしまうことに繋がることを暗に意味しているともいえる。

以上を踏まえると、貸出機能／読書といったように個々の機能の働きをタコソポ的に捉えて利用者と結びつけるだけでなく、それをいかに連携させて多様な利用の仕方に対応させていくのかと考えることが、図書館の「場」の機能のさらなる向上に繋がっていくと考えることができる。例えば、読書の形態を黙読にのみ見出すのではなく、共読など人々の多様な読書の形態を意識し、それに対応できる新たな図書館像<sup>xv</sup>を提示することが、図書館に読書の場としての積極的な意味を持たせることにも通じていくと考えることはできないだろうか。

## 【註】

（ウェブ参照日はすべて 2017 年 2 月 21 日）

i 例えば、2003 年に Tsutaya を運営するカルチュア・コンビニエンス・クラブは Starbucks Coffee と提携して BOOK&CAFÉ という新たなスタイルを提供した。そこでは Tsutaya と Starbucks Coffee が併設されており、本を購入していなくても双方のお店を行き来することが可能である。

[http://www.ccc.co.jp/showcase/sc\\_004027.html?cat=tsutaya](http://www.ccc.co.jp/showcase/sc_004027.html?cat=tsutaya)

ii ブックオフなど。なお、一部で立ち読み禁止になってきているが、「あくまでご意見があった直営店舗で行っている試験的な措置なので、今のところ立ち読み禁止を全店で実施する予定はございません」とされている。

「立ち読み禁止のブックオフ 意図を本部に聞いてみた」

<http://www.excite.co.jp/News/bit/E1441687866100.html>

iii たとえば鴻巣市立鴻巣中央図書館など。

[https://www.trc.co.jp/information/140620\\_nescafe.html](https://www.trc.co.jp/information/140620_nescafe.html)

iv 吉田昭子．大学生読書：大学 1 年生の読書体験記．文化学園大学紀要，47，2016．

v 永嶺重敏．黙読の＜制度化＞．図書館界，vol.45，no.4，1993，p358．

vi 富山英彦．読書空間論：意味の生産現場としての図書館．マス・コミュニケーション研究，no.54，1999，p175．

vii 山本順一ほか著．図書館情報学入門．有斐閣，1997，11p．

- viii 根本彰. 動向レビュー 「場所としての図書館」をめぐる議論. カレントアウェアネス. 2005, No286, p21-25.
- ix 秋田喜代美. 小中学生の読書行動に家庭環境が及ぼす影響. 発達心理学研究, 第3巻, 第2号, 1992.
- x マックス・ウェーバー. 社会学の基礎概念. 恒星社厚生閣, 1989, 113p.
- xi 濱嶋朗ほか編. 社会学小辞典. 有斐閣, 2005, 451p.
- xii 最初の面接の対象者・対象集団に, 友人・知人に紹介を依頼し, 紹介された人に対しインタビューを行い, 紹介を繰り返し, 調査対象者を採用していくサンプリング方法のことである.
- xiii 本屋とカフェが併設しているものに関しては, 大きく分けて下記の3つの種類がある。ただし購入しないで飲食しながら読めるという点からみると, 1と2と3の間に境界線を引くこともできる。
- (1)本屋が主体で隣にカフェがついており, 購入した冊子体は店内に持ち込むことができるもの。
- (2)カフェが主体で店内の本を自由に読む, もしくは買うことができる。ブックカフェ。
- (3)カフェと本屋を行き来できる併設・複合しているもの。Book&Cafe。
- xiv ブックオフオンライン株式会社が提供するネット書店。
- xv 大学図書館などで導入が進んでいる「ラーニング・コモンズ」も一つの可能性の形といえるのではないか。

## A Study on the Place to Read :

### From an interview survey on places such as libraries

Reina TOYOSHIMA, Shun'ya TOBE, Fumi KATAYAMA

#### **Abstract**

This paper attempts to clarify the reason to choose the place to read. From the interview survey, it was found that informants preferred to read at home, cafes, libraries, transportation facilities (train, bus, etc.), and multifunctional large-scale bookstores. In addition, by classifying the reasons for choosing the place to read, it became clear that their life stories and reading related factors influenced on informant's choices. Based on these results, this paper considered the place to read from the viewpoint of diversity of reading.

#### **Keyword**

Reading, place to read, social action theory, diversity, library